

名大医学部学友時報 2026 8

目次

- | | | | | | |
|---------------------------|-----------|------------|----------------------|------------|------------|
| 1. 令和 8 年学友会評議会を開催 | (2) | 7. クラス会だより | 錦見 盛光 | (12) | |
| 2. プレスリリース | (3) | | 直江 知樹 | (13) | |
| 3. 随筆 | 上田 一仁 | (5) | | 渡邊 和彦 | |
| 4. 会員寄稿 | 櫻井 武 | (6) | 8. 支部だより | 首都圏支部総会 | (14) |
| 5. 名大医学部サッカー大会、四半世紀を超えて | | | 9. 令和 8 年度 (2026 年度) | | |
| | 松下 英信 | (8) | 名古屋大学医学部学友会支部総会のお知らせ | (15) | |
| 6. 第 35 回基礎医学セミナー研究発表会授賞式 | (9) | 10. 編集後記 | (16) | | |

学友会評議会開催



令和 8 年学友会評議会を開催

7 月 4 日（土）医学部鶴友会館 2 階大会議室において、令和 8 年学友会評議会が開催されました。会議は対面と Web 会議によるハイブリット形式で行われて、31 名（対面出席 20 名、オンライン出席 11 名）の出席と 43 名の委任状を得て、各議案の審議と報告が行われました。

はじめに、学友会会長の勝野雅央先生が開会の辞を述べられ、来年以降も議長・副議長を輪番制の役割分担で続けていくか、負担はないか審議されました。令和 8 年度の議長に庶務部長の西口康二先生、副議長に学友会副会長・名古屋支部支部長の宇野岳人先生が選出されました。続いて、会長の勝野雅央研究科長、副会長の丸山彰一病院長と宇野岳人名古屋支部長よりご挨拶があり、開会のお礼と将来への抱負を述べられました。その後、新評議員と新支部長（※ 1）の紹介が行われました。次に、この一年間にご逝去された 44 名の会員に対して黙祷が捧げられ、一同謹んでご冥福をお祈りいたしました。

議事では、まず会計部長の八谷寛先生より会務報告が行われ、令和 7 年度の会計監査報告及び令和 8 年度の予算案についての報告がありました。審議では、増加傾向にある通信費や学友大会誌の費用について活発な議論が交わされました。また、令和 7 年度に開催された各支部総会の内容（※ 2）が報告され、令和 7 年度第 116 回学友大会についての活動報告及び会計報告が行われました。さらに、今年の学友大会委員長である佐藤公治先生から、令和 8 年度第 117 回学友大会についての案内があり、10 月 10 日（土）に名古屋観光ホテルにおいて開催予定であることが報告されました。

続いて、退職された名誉教授や大会委員長など 10 名（※ 3）が、新たに名誉会員に承認されました。次回以降の評議会の開催日については、今後は厳則「7 月第 2 土曜日」にすることが承認されました。その後、免除されている名誉会員の会費と学友大会の会費について、限りある予算の中での今後の取り扱いの仕方について意見が交わされました。

最後に議長の西口先生が閉会の辞を述べられ、本年度の評議会は終了しました。評議会終了後の懇親会では、とても和やかな雰囲気の中で出席者の交流が深められました。

※ 1 新評議員（5 名）

（支部）

東三河支部 松井 英夫 先生
東濃支部 安藤 広之 先生
首都圏支部 山下 守 先生

（本部）

病態外科学講座 乳腺・内分泌外科学分野 教授
永橋 昌幸 先生



看護キャリア支援室 教授
岩崎 朋之 先生

新支部長（1 名）

岡崎支部 船川 武俊 既存評議員

※ 2 令和 7 年度 支部総会と講演者（分野等）

首都圏支部	脇田 教授（ウイルス学）
東三河支部	今釜 教授（整形外科学）
岐阜支部	勝野 教授（研究科長）
	室原 教授（循環器内科学）
岡崎支部	梶山 教授（産婦人科学）
三重県支部	丸山 教授（腎臓内科）
名古屋支部	仲矢 教授（疾患制御学）
静岡県支部	江畑 教授（腫瘍外科学）
	齋藤 教授（脳神経外科学）
大垣支部	梅垣 教授（老年科学）
	橋川 教授（形成外科学）
中国四国支部	木村 教授（ウイルス学）
	梶山 教授（産婦人科学）

※ 3 新名誉会員（1 名）

湯澤由紀夫	第 111 回大会委員長
木村 宏	名誉教授（元医学系研究科 教授）
豊國 伸哉	名誉教授（元医学系研究科 教授）
室原 豊明	名誉教授（元医学系研究科 教授）
曾根三千彦	名誉教授（元医学系研究科 教授）
秋山 真志	名誉教授（元医学系研究科 教授）
松下 正	名誉教授（元医学部附属病院 教授）
玉腰 浩司	名誉教授（元医学系研究科 教授）
永田 浩三	名誉教授（元医学系研究科 教授）
石川 哲也	名誉教授（元医学系研究科 教授）

（文責：安藤 優里）

● プレスリリース ●

PM2.5 に含まれる“スズ”がスギ花粉症を悪化させる可能性

—環境汚染とアレルギーの新たな関係—

名古屋大学大学院医学系研究科 環境労働衛生学

たざき あきら
田崎 啓

背景

日本では、スギ花粉症の有病率は約 50% に達しているとの報告もあり、「国民病」とも言われています。近年、大気汚染物質がスギ花粉症に悪影響を及ぼすことが疑われていますが、科学的な解明は進んでいません。私達はこれまでに、大気汚染物質である鉛 (Pb) がアレルギー性鼻炎の増悪因子であることを報告しています¹。一般的に、同族の元素は類似した化学的性質を持つことが知られており、Pb と同族元素 (第 14 族) であるスズ (Sn) が、アレルギー性鼻炎 (AR) の病態に影響を及ぼす可能性が考えられました。一方で、AR や喘息患者において気道は大気中 Sn に直接曝露されるアレルギー炎症の主要部位であるにもかかわらず、ヒトの気道における曝露状況やそれを模した条件下での Sn 曝露が疾患に及ぼす影響は依然として不明でした。そこで、本研究ではヒト横断的疫学研究とマウス縦断的介入実験研究を行い、Sn がアレルギー性鼻炎にどのように作用するのかについて調べました。

方法

疫学研究：スギ花粉飛散期 (2 月～4 月) の、スギ花粉症患者 44 名および非アレルギー健常者 57 名を対象とし、アレルギー性鼻炎の鼻炎症状スコアと鼻腔洗浄液および血清中 Sn 濃度の関連を年齢・性別・BMI・喫煙歴などの交絡因子で調整した多変量ロジスティック回帰分析を行った。

動物実験：オボアルブミン (OVA) 感作 AR モデルマウスを用い、2 つの曝露モデルで検討しました。第 1 に、実際の患者で観察されたレベルに相当する量の Sn を点鼻投与し、症状および各組織の Sn 濃度を評価しました。第 2 に、PM2.5 の物性を模した人工エアロゾルに大気中 Sn 濃度に相当する Sn を含有させ、吸入曝露実験を行いました。鼻粘膜内での Sn の空間分布はレーザーアブレーション-ICP-MS による元素イメージングで解析し、ムチンとの共局在は PAS 染色との重ね合わせにより定量しました。

研究成果

ヒト疫学研究：スギ花粉症患者 44 名と健常者 57 名を対象に、花粉飛散期の鼻腔洗浄液および血清中の Sn 濃度を測定したところ、

- 花粉症患者の鼻腔内 Sn 濃度は、健常者に比べて 3-4 倍高い (図 1 A)
- 鼻腔内 Sn 濃度は、花粉症の症状と有意に関連する (図 1 B)

ことが分かりました。

次に、ヒト疫学研究で得られた知見を検証するため、患者鼻腔内で観察された濃度に相当する Sn を用いてマウス実験を実施しました。患者と推定同等量の Sn をアレルギー性鼻炎モデルマウスの鼻腔に点鼻投与したところ、アレルギー症状は、有意に増悪しました (図 2)。これらのことから、大気汚染物質である Sn 曝露がスギ

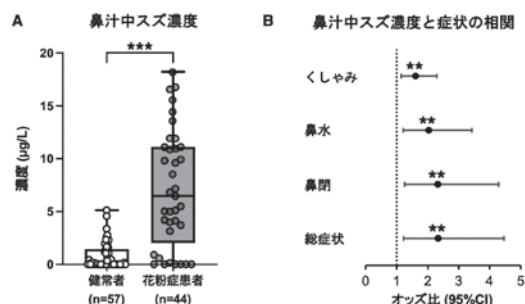


図 1 ヒト疫学研究の結果

(A) スギ花粉飛散期における花粉症患者 (n=44) と健常対照者 (n=57) の鼻汁中 Sn 濃度。Mann-Whitney U 検定による群間比較。(B) 鼻汁中 Sn 濃度と自覚症状スコアとの関連を示す調整済みオッズ比 (年齢・性別・BMI・喫煙歴で補正)。**p<0.01, ***p<0.001

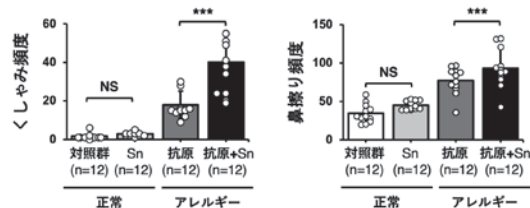


図 2 Sn の鼻腔曝露によるアレルギー性鼻炎モデルマウスの鼻炎症状の悪化

花粉症を増悪させる可能性が初めて示されました。

ここで、Sn がアレルギー性鼻炎を増悪させることが示された一方で、なぜ患者の鼻腔内で Sn 濃度が高くなるのかという新たな疑問が生じました。同じ空気を吸っているにもかかわらず、なぜスギ花粉症患者では、健康者に比べて鼻腔内の Sn 濃度が高いのでしょうか？また、Sn はどのようにしてスギ花粉症を増悪させているのでしょうか？Sn は、一般的に大気中では浮遊粒子状物質 (SPM) や微小粒子状物質 (PM_{2.5}) の形状で存在します。そこで、Sn を PM_{2.5} に類似したエアロゾルに含ませてモデルマウスに吸入させました。その結果、

- アレルギー性鼻炎モデルマウスで、Sn の鼻腔内蓄積が 2-3 倍に増加 (図 3 A)
- 一方、肺への沈着は 30-40% 低減 (図 3 B)

することがわかりました。これは、「健康個体において PM_{2.5} は鼻を通り抜け肺まで達する」という従来の知見とは異なる分布です。アレルギー性鼻炎の個体では、PM_{2.5} が鼻腔で捕捉され、肺に到達しにくいことを示した初めての結果です。

それでは、なぜ、PM_{2.5} 類似エアロゾルに含まれた Sn は鼻腔に捕捉されるのでしょうか？病理組織化学的解析と元素イメージングを組み合わせた詳細な解析の結果、

- アレルギー性鼻炎モデルマウスでは鼻腔の粘液 (ムチン) が増加 (図 4 A)
- Sn はムチンと高率 (67%) で鼻腔内の同じ場所に存在 (図 4 B)
- Sn 曝露でムチン産生がさらに増強 (図 4 A)

することが明らかになりました。これらの結果は、アレルギー性鼻炎の個体が Sn に曝露すると「スギ花粉症等のアレルギー性鼻炎発症→粘液過多→鼻腔内における Sn 滞留→アレルギー性鼻炎の症状増悪」という新しい可能性が示されました。

今後の展開

本研究の意義は、「大気汚染物質の 1 つである Sn はアレルギー性鼻炎増悪因子である」ことを示したことに加えて、「アレルギー性鼻炎を持つ個体では PM_{2.5} に含まれる Sn が鼻腔に蓄積されやすい」という新しい可能性を示した点にあります。

本成果は、大気汚染物質とアレルギー性鼻炎を、より直接的に関係づけるもので、アレルギー性鼻炎の病態解明 (医学的意義) にとどまらず、大気汚染のリスク評価・環境基準値策定の基礎データとして貢献できます (環境学的意義)。さらに、アレルギー性鼻炎に焦点を当てた大気汚染の健康リスクの再評価を介した環境政策への応用も期待されます (社会的意義)。

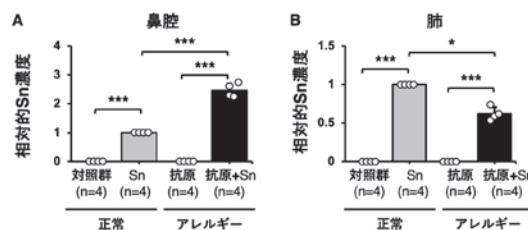


図 3 Sn エアロゾルの経気道曝露による鼻腔および肺における相対的 Sn 濃度

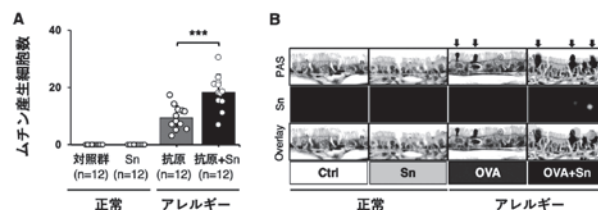


図 4 Sn 曝露による病理組織的变化と Sn の鼻甲介における分布

引用文献

1. Xu H, Ohgami N, Sakashita M, Ogi K, Hashimoto K, Tazaki A, Tong K, Aoki M, Fujieda M, Kato M. Intranasal levels of lead as an exacerbation factor for allergic rhinitis in humans and mice. *J Allergy Clin Immunol.* 2021; 148:139-147.

発表論文

Nishadhi ASMD[†], Sumiya S[†], Tazaki A[†], Kagawa T, Abdelmoneim M, Sakashita M, Ogi K, Fujieda S, Kato M (†: equal contribution). Emerging Risk: Intranasal Tin Exacerbates Allergic Rhinitis in Humans and Mice. *Allergy.* 2025; DOI: 10.1111/all.70180

随筆

赤ちゃん和家人の希望を支える周産期緩和ケア

～「周産期緩和ケアの集い」に参加して～

名古屋大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター 新生児部門

う え だ

か ず と

上 田

一 仁

(平成 21 年卒)



はじめに

私は今、名古屋大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センターで新生児医療に携わっています。妊娠から出産、そして産後までを支える周産期医療は、漫画やドラマの『コウノドリ』などを通じて広く知られるようになりました。あわせて、赤ちゃんを助ける新生児集中治療室(NICU)についても社会的な認知が高まっています。しかし今回のタイトルを見て、「周産期と緩和ケア？」と首を傾げられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

医学の発展と周産期医療体制の整備により、現在の日本は多くの新生児を助けることが出来るようになりました。一方で、集中治療を尽くしても救命できない児や予後の見通しが厳しい児も残念ながらいらっしゃいます。

そのような新生児や胎児に対し、近年、周産期緩和ケア(perinatal palliative care)が世界的に注目されています。

周産期緩和ケアとは

周産期緩和ケアの対象は前述のような予後の見通しが厳しい可能性がある胎児や新生児です。具体的には在胎 22 週など極めて未熟性の高い児、重篤な基礎疾患や先天性症候群を有する児、また、予期せぬ死亡に至る胎児や新生児などが挙げられます。

妊娠から出産、胎児期から新生児期という大きな変化がある中で、その子と家族の大切な時間を支えることが周産期緩和ケアの大きな役割です。

「周産期緩和ケアの集い」について

こうした中、日本では 2025 年から「周産期緩和ケアの集い」という研究会が開催されています。これは国立成育医療研究センターの「疾患を問わない小児緩和ケアの体制整備のための基盤構築事業」(成育医療研究開発費 2024B-21 研究代表者: 余谷暢之医師)のひとつとして行われています。

この研究会では、産婦人科医、小児科医、助産師、看護師、心理士、遺伝カウンセラーなど多職種の専門家が全国から集まり、周産期における緩和ケアの視点から、ウェルビーイング(well-being)支援の実践モデルと多職種連携による最適なサポート体制について検討することを目指しています。

私自身は研究会発足時から企画運営に携わる機会をいただいております。今年は 2 月 22 日に「第 2 回 胎児期からのウェルビーイング支援 ―周産期緩和ケアの集い―」が東京で開催されました。

周産期緩和ケアの現状と課題

今回の集いでは、以下の 5 つのセッションで討議を行いました。

1. NICU 医療スタッフが感じる新生児緩和ケアの困難感 ―現場の声からケアを考える―
2. 超早産期(妊娠 22 週)の分娩における家族と医療スタッフの意思決定とその支援について
3. 英国における周産期緩和ケアの家族向け資料紹介
4. 個人の「もやもや」を組織の力へ: 周産期緩和ケアを支える対話の土壌
5. リサーチで広げる! 周産期緩和ケアのこれから

そして各セッションの討議を通じて、現場での協働意思決定のあり方、医療者間や医療者と家族の間での適切な情報共有、出生前から出生後まで一貫したサポート体制の構築などに様々な課題が存在していることが浮かび上がりました。

加えて、集中治療と緩和ケアを同時に準備して進める「パラレル・プランニング」の共有、各施設の強みを見つめ周産期緩和ケアに活かす話し合い、この領域のリサーチクエストの検討などを行うことができ、次の展望を見出すことができました。

今後に向けて

周産期緩和ケアはたとえ赤ちゃんの未来が不確かであったとしても、その子と家族の希望を支えるケアです。国内外とも発展中の領域であり、診療やリサーチを通じて周産期緩和ケアの輪を一緒に広げる仲間を募っています。興味を抱かれた方はぜひお気軽に当方(kazuto.u@nagoya-u.jp)までご連絡ください!



「第 2 回 胎児期からのウェルビーイング支援 ―周産期緩和ケアの集い―」での発表の様子(筆者)

第117回 名古屋大学医学部 学友大会のご案内

残暑の候、皆様にはお変わりなくご活躍のことと存じ、心よりお慶び申し上げます。
さて、このたび今年度の学友大会委員長を仰せつかり、現在、多くの先生方と協議を重ねながら準備を進めております。今回も多数の会員の皆様にご参加いただき、盛大な会となりますよう念じております。
つきましては、万障お繰り合わせのうえ、ぜひご参加くださいますようお願い申し上げます。

2026年8月

第117回名古屋大学医学部学友大会 委員長 佐藤 公治
(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 院長/名古屋大学整形外科同門会 会長)

日時

2026年10月10日(土) 14時15分～

申込期間

令和8年8月31日(月)まで

場所

名古屋観光ホテル 2階 曙の間
〒460-8608 名古屋市中区錦一丁目19番30号
TEL 052-231-7711

参加費

一般会員 16,000円
医員(研修医を含む)、大学生 8,000円
会員のご同伴者 8,000円
非会員 17,000円

申込方法

以下のURLもしくは、QRコードにてお申込みください。

【学友会員】

<https://forms.office.com/r/Ez47TZ6Sss>


【非会員】※

<https://forms.office.com/r/pm1US7FVM2>


行事

- 総会
- 記念講演
講師 福岡 伸一 先生
京都大学卒および同大学院博士課程修了。ハーバード大学研修員、京都大学助教授などを経て、現在、青山学院大学教授・米国ロックフェラー大学客員教授。 <https://www.fukuokashinichi.com>
演題：いのちの動的平衡(仮題)
- 懇親会
・ジャズバンド演奏 WHY ジャズ楽団 塩之谷香先生(塩之谷整形外科 理事長)
・名古屋大学応援団演奏



【一筆啓上のお願い】

大会誌に一筆啓上欄を設けております。この企画に、関連病院、支部、クラス会、医局よりご賛同を賜りますようお願いいたします。

編集後記

夏の陽射しが日に日に強まり、本格的な夏の訪れを感じる季節となりました。新年度が始まったのがつい先日のように思えますが、気が付けば前期も終わりに近づき、時間の流れの早さを感じています。

大学生活では、学年が上がるにつれて学ぶ内容がより専門的になり、知識を覚えるだけでなく、自分で考え、理解を深めることの大切さを実感する機会が増えてきました。思うようにいかないこともあります、新しい知識がこれまで学んだこととつながったときには、大きな楽しさや達成感を感じます。

また、授業や勉強だけでなく、部活動や友人との時間も、大学生活を彩る大切なものだと感じています。忙しい日々の中では、つい目の前のことに追われてしまいがちですが、周囲の人とのつながりや、何気ない日常の時間も大切にしていきたいと思っています。これからさらに暑さが厳しくなりますが、体調に気を配りながら、目の前の課題に一つひとつ丁寧に取り組み、実りある学生生活を送っていききたいと思います。

よろしく願いいたします。

(橋元 万由子)

部長	梶山 広明	6年	小野 瑞稀	阪口 竜佑	松井のぞみ	森本 崇嗣
委員	芳川 修久	5年	安藤 優里	坂本 鈴奈	チーフ 相地 竜彦	味村 柊哉
	玉内 学志	4年	天野 祥汰	佐野 文哉	橋元万由子	村松舞奈美
学友会事務局	中島 千夏	3年	櫻井あんり	高木 彰吾	原田理紗子	平田 紗菜

【時報部のe-mailアドレスのお知らせ】

本時報に対するご意見、ご感想、情報等は、numed.jiho@gmail.comへお寄せください。

発行所 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65

名大医学部学友会

編集発行人 時報部長 梶山 広明

印刷所 名古屋市中区千代田5-11-16

株式会社山誠社

購読料 (年7,000円 会費を含む) 毎月22日発行

学友会 振替口座(00880-7-3838)

電話 (052) 744-2512(直通)

FAX (052) 741-7676

メール gakuyuukai@med.nagoya-u.ac.jp